徳島新聞　令和２年５月23日（土）

健康

乳がん診断 子ども産めるか

妊孕性温存で可能に

阿部 彰子
徳島大学病院
産科婦人科助教

質問 34歳の独身女性です。胸のしこりに気付いて病院を受診しました。乳がんとの診断で、治療を受けることになりました。将来は子どもを産めるのですか。

回答 がんの診断を受け、これから治療を受けるのは不安だと思います。まず、主治医や看護師に、不安な気持ちと、疑問に思うことを遠慮せず相談してください。がん治療が卵子にどの程度影響するかや、がんの治療期間や治療終了後に妊娠が許可されるまでの期間も、治療内容によって各患者で異なります。特に乳がんでは、手術のみで治療を終えられる場合もあれば、維持療法としてホルモン療法を5年間もしくは10年間行うこともあります。治療が長期間にわたる場合は、加齢による卵への影響も懸念されます。

抗がん剤の晩期合併症の一つに妊孕性（妊娠する力）の低下があります。その対策として、将来の妊娠、出産に備え、卵子や精子、受精卵(胚)を凍結保存することが可能になっています。徳島大学病院では、AYA世代と呼ばれる思春期から若年成人を対象にしたがん診療にチームで取り組んでいます。これまで乳がんや白血病などに対して、治療開始前や治療中（抗がん剤の休薬期間や、手術後で抗がん剤治療前）などに、排卵誘発を行って採卵し、独身女性は卵子凍結を、既婚者には胚凍結を行っています。がんに対する治療に専念した後、無事にがん治療が終わり、主治医から妊娠許可が出た場合は、凍結している胚を溶かして胚移植を行います。独身時に卵子凍結を行っていた場合、結婚した後に卵子を溶かして顕微鏡授精を行い、胚移植を実施します。一連の治療を受けた後、妊娠し、出産した女性もいます。しかし、年齢やそれまでに行われた治療の影響などによっては有効な卵を得られないことがあります。がん生殖における妊孕性温存は、凍結技術の進歩により可能になった体外受精の一つとして行われるため自費診療です。

妊孕性温存を行う場合の注意点としては、なによりもがんの治療を遅滞なく遂行することが大原則です。がん治療によって妊孕性を低下させる可能性があるかどうか。そして、その可能性がある場合には採卵する時間的余裕があるか。こうした確認が重要です。がんと診断されてから、限られた時間の中で意思決定を行うのは大変なストレスがあるでしょう。一人で抱え込まず、家族や主治医、看護師に相談してください。安心して前向きにがん治療を受けられるよう、徳島大学病院では、がん生殖相談連携体制を整えています。徳島大学病院がん診療連携センターのホームページを参照ください。

（第4土曜掲載）

徳島大学病院の妊孕性温存治療担当チーム
＝徳島市の同病院

がん 何でも Q&A

卵子の凍結技術 進歩

がんに関する質問は
徳島がん対策センター
〈電088（634）6442〉
（平日午前8時半から午後5時まで）へ。